

博士学位論文審査要旨

2018年6月16日

論文題目： 横光利一とその時代—モダニズム・メディア・戦争—

学位申請者： 黒田 大河

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 関西学院大学文学部 教授 大橋 毅彦

副査： 文学研究科 教授 西川 貴子

要 旨：

本論文は、横光利一の商品研究を中心として、昭和文学史におけるモダニズムの可能性とその限界を明らかにすることをめざした論考である。

第1部「横光利一とモダニズムの時代」では、モダニズム文学における映画的認識の特質を、横光の小説「上海」や「機械」で検証し、新感覚派時代の「ナポレオンと田虫」における直喩的表現を、歴史記述の問題と関連づけて考察した。また、横光の評論「純粋小説論」が提起する問題領域を、阿部知二の「主知的文学論」や春山行夫の〈主知主義〉の主張と結んで検討し、モダニストたちが日本回帰する昭和10年代の孕む課題を、故郷としての〈関西文化圏〉の視座から析出した。同時代資料の精査に裏付けられた説得力のある論考である。映画的認識や映画的表現は後年の大作「旅愁」でも検証可能と思われることや、横光の作家活動の区分をめぐってより明確な立場の表明が期待できるなど、今後もさらなる研究の進展が見られよう。

第2部「異文化体験をめぐって」は、「上海」と「旅愁」に見られる異文化体験の意味を考察し、横光の欧州体験とアジア体験の関わりを明らかにした。「上海」論では作中人物の使用言語に着目し、主人公と女性たちとの関係性をとおして「上海」を腑分けし、「旅愁」論ではポストコロニアル批評を援用しつつ、従来、見落とされがちだった中国体験・朝鮮体験を視野に入れて「アジアへの旅愁」を分析した。当時交戦国だった中国と日韓併合下にあった朝鮮に対する横光の姿勢の差異をより明確にすべき点はあるものの、横光の〈外地〉体験研究に新生面を拓いた画期的な論考である。併収された堀田善衛論では、短編連作「祖国喪失」を横光が捉えた課題を展開した作品と位置づけ、「祖国喪失者のアイデンティティ」が「インターナショナル（超国境）」「クレオール（脱国境）」の思想にまでつながっているとした。

第3部「メディアと戦争をめぐって」では、戦時下におけるラジオ放送と活字メディアとの関わりを分析しその可能性と功罪を論じたうえで、横光の戦中・戦後の問題をあぶり出した。日本放送協会発行の時局雑誌『放送』を詳細に検討し、大衆が「国民」として統合される様相や文学者の関わりを精査して貴重な研究となっている。横光の戦後作品「夜の靴」や「微笑」の分析も丁寧である。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2018年6月16日

論文題目： 横光利一とその時代—モダニズム・メディア・戦争—

学位申請者： 黒田 大河

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副 査： 関西学院大学文学部 教授 大橋 毅彦

副 査： 文学研究科 教授 西川 貴子

要 旨：

上記審査委員3名は、2018年6月8日、午後6時30分から約2時間30分にわたり、徳照館第1共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（フランス語）についても、本論文の内容に関わる形で語学試験を行い、十分な学力のあることが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 横光利一とその時代—モダニズム・メディア・戦争—

氏名： 黒田 大河

要旨：

序論

本論は横光利一の作品研究を中心として、昭和文学史におけるモダニズムの可能性とその限界を明らかにすることを目的とする。モダニズムとは近代という時代の持つ限界を意識しながらそれを更新しようとする思想・芸術・運動のことである。日本近代にモダニズムは存在し得たのか。横光利一の諸作品を検討することでその意義を明らかにする。

論文ではモダニズムの時代性、横光利一の異文化体験、メディア論という大きく三つの方向から検討をすすめるが、各論点に共通する課題は次の通りである。

- ・「三派鼎立」構図を相対化し、新感覚派を再評価すること。
- ・モダニズムとしての震災後文学と戦後文学との繋がりを考察すること。
- ・横光の外地体験と作品に見られる相対化の構図について考察すること。
- ・戦争責任論を超えて『旅愁』を再読すること。

これらの論点は次のように関わりを持つものである。

昭和文学史における三派鼎立図式とは、自然主義、新感覚派、プロレタリア文学を新旧と左右の対立として捉える文学史観であるが、モダニズムを自然主義的描写への批判として捉えた上、社会意識の欠如として否定する進歩史観が前提とされている。横光利一の再評価からモダニズムの価値を再検討することで、戦前のモダニズムと戦後文学との繋がりを確認する。

横光利一評価の課題として『旅愁』評価がある。第二次世界大戦の敗戦後において戦争責任論のなかで批判された文学者としての横光評価は、戦中に東西文化の対立を描いた『旅愁』を書き継いだことと深く関わっている。『上海』から『旅愁』に繋がる横光利一の作品史における外地体験＝異言語体験を考察することで、『旅愁』を再評価することが可能となる。日本回帰と見られる言説にも相対化の構図が貫かれていることを分析から見出す。

本論

第Ⅰ部「横光利一とモダニズムの時代」ではモダニズム文学の特色を映画的認識と概観した上で、横光利一作品の文体、同時代作品と思潮との関わりを検討する。

第一章「モダニズムの光源—映画的認識と形式主義文学」では日本近代文学史においてモダニズムとは何だったかという問題を、映画という新しいメディアの誕生に伴う認識論的な構図の変化という側面から論じる。

第二章「『ナポレオンと田虫』—歴史である「かのやうに」」では新感覚派時代の作品として「ナポレオンと田虫」を分析し、表現主体による直喩的表現と、横光作品の歴史記述における視点の問題を結びつけて考察する。

第三章「『純粋小説論』と主知主義とをめぐって」では阿部知二『主知的文学論』と横光利一『純粋小説論』の内的連関性を考察し、文学的伝統の受容と対読者意識の分析から伝統回帰の発想の在り方を批判的に検討する。

第四章「『故郷』としての「関西文化圏」—「三つの記憶」から」では、東京と対比的に析出された「関西文化圏」という文化的なまとまりを一つのフィクションとして捉え、その地政学的

な付置を横光利一、および同時代作家と対比しつつ検討する。

第Ⅱ部「異文化体験をめぐって」では『上海』と『旅愁』に見られる異文化体験の意味を考察し、欧州体験とアジア体験の関わりを明らかにする。

第五章「『上海』試論－身体と言語をめぐって」では、上海体験が身体と言語の物質性に突き当たる異言語体験でもあったことを指摘し、『上海』に描かれた言語の階層性と視線を媒介とした身体表現を分析する。

第六章「アジアへの旅愁－横光利一の〈外地〉体験」では、横光利一の『旅愁』が欧州体験の形象化であったと同時に、横光の〈外地〉認識をも反映するという前提から、『旅愁』における中国体験、朝鮮体験を横光の「国語」意識の問題を視野に入れて分析する。

第七章「作品としての『歐洲紀行』－『旅愁』への助走」では、横光利一の欧州体験を『歐洲紀行』を中心として分析する。引用された書簡の検討や、改稿過程の分析から日本とパリの相対化という構図を見出す。

第八章「横光利一の回帰－欧州体験から『旅愁』へ」では横光利一における伝統回帰を再検討する。欧州体験後に西洋を相対化する視線を獲得する過程で、対照的な存在として永井荷風を意識していた可能性を検証する。

第九章「『旅愁』論のアポリアーポストコロニアル・ナショナリズム研究の領域から」では、戦時下の問題を論じる際に生じるアポリアを指摘した上で、『旅愁』の表現を再検討する。『旅愁』にはナショナリズムの持つ危険性と、植民地のナショナリズムの持つ意味が書き込まれていることを指摘する。

第一〇章「堀田善衛と上海－「祖国喪失」と「無国籍」のあいだで」では、堀田善衛の「祖国喪失」、「歯車」を分析することで、戦中・戦後の上海を対象とした表現の特質を明らかにし、亡命者・無国籍の人々が可能性として描かれていることを指摘する。

第Ⅲ部「メディアと戦争をめぐって」では戦時下に於けるラジオ放送と活字メディアの関わりを中心に分析、戦時メディアの可能性と功罪を論じると共に、横光作品がそれらのメディア空間を意識した上で戦中・戦後を描き得たことを明らかにする。

第一一章「『国民』統合の〈声〉の中で〈書く〉こと－時局雑誌『放送』に見る戦時放送と文芸（一）」では、日本放送協会が発行した時局雑誌『放送』を対象に、放送メディアが大衆を「国民」として統合するさまを検証する。〈書く〉ことで戦争へと動員された文学者が、いかにラジオ放送の〈声〉と関わったかを論じる。

第一二章「重層化する〈声〉の記憶－時局雑誌『放送』に見る戦時放送と文芸（二）」では、「放送文芸」（ラジオドラマ）を分析、聴取者に対する啓蒙的な〈声〉の力を考察する。また、作品分析から聴取者が〈声〉なき〈声〉を聴き取った可能性を指摘する。

第一三章「『夜の靴』－〈敗戦〉という「不通線」」では、前章までのメディア分析を前提として、横光利一の敗戦日記形式の作品『夜の靴』を分析する。語り手「私」がラジオ放送を回避する姿勢から、「玉音放送」に象徴される〈敗戦の儀式空間〉からの距離を読み解く。

第一四章「『微笑』論－横光利一の戦中・戦後」では、横光利一の遺作である『微笑』を、戦後から戦中を対象化する表現として論じる。論文の前半部分では、モデルとなる事実を、戦後の新聞報道から分析する。論文後半では、作品世界を成立させるための語りの技法を分析する。

まとめ

以上の考察から、結論として見出されたことを列挙し、総括する。

第Ⅰ部、第一章では、横光利一『上海』の検討によって、断片化した言語によって捉えられた上海イメージが、詩と小説というジャンルを横断していることが分った。また映画の認識が現代のメディア空間を形成していることが確認できた。

第二章では、「ナポレオンと田虫」の分析から、実際には存在しない類似性を成立させる直喩的認識が、横光作品における歴史を成立させる意味作用と言えることが分った。

第三章では、阿部知二の「主知」概念がその根拠を「伝統」へと求めるのに対して、知二に共鳴しながら横光もまた「純粹小説論」において「伝統」を課題としていくことが分った。

第四章では、横光にとっての「故郷」は、〈日本的〉なものの観念をへて分裂していったが、「関西文化圏」は「故郷」の痕跡／イメージとして偏在することが見出された。

第Ⅱ部、第五章では、『上海』の主人公である参木が、母語である日本語を差異化、特権化しないが故に、身体としての日本が浮上してくることが分った。

第六章では、『旅愁』において「支那」の〈他者〉性が表現されながら、朝鮮については「裡なるもの」として美意識のレベルでの共感のみが描かれたことが分った。

第七章では、『歐洲紀行』の分析から明らかとなった相対化の構図が、『旅愁』において自己のルーツを探り続ける主人公矢代の姿につながることを分った。

第八章では、『旅愁』周辺の作品と横光の言説とを検討し、二項対立図式を相対化し続けるのが「梶もの」であり、日本回帰として単純に定義されるものではないことが分った。

第九章では、西洋近代合理主義のナショナリズムを批判しながら、日本もまた宗主国として植民地のナショナリズムを包摂する欺瞞が、『旅愁』というテキストにナショナリズムの重層性として描き出されていることが分った。

堀田善衛を検討した第一〇章では、「祖国」という語の孕むナショナリズムと、「喪失」という語の持つ寂寥感とを描き出しながら、ディアスポラ達を引き裂く「国家」と、「故郷」という身体化された観念が見出された。

第Ⅲ部、第十一章では、ラジオ放送と文学作品の検討から、「国民」を統合する戦時下のメディアの中で、ラジオの〈声〉との緊張関係のなかで〈書く〉表現者たちの特質が見出された。

第一二章では、ラジオドラマの検討から、聴取者がラジオの背後に聴きとったもう一つの〈声〉とは、「国民」の紐帯から排除されたものたちの〈声〉なき〈声〉であると結論した。

第一三章では横光利一の敗戦小説『夜の靴』を検討し、個別の戦争体験から生まれた様々な〈敗戦〉は、共同体験に収斂させることの出来ない「不通線」だと定義づけた。

第一四章では、横光の遺作「微笑」を検討し、戦後から戦中を断罪するだけではなく、戦後と戦中の時空が相互に問いかけを発するような構造が成り立っていることが分った。

以上のように、横光の試みは「三派鼎立」構図に収まるモダニズム像を超え、相対化を貫こうとするものであった。その意味で戦後文学と繋がる意義を持つものである。また、〈外地〉体験によって得た異言語体験がナショナリズムに留まらない相対化の構図をもたらすものであることも明らかとなった。したがって戦争責任論を超えて『旅愁』を再評価することは本論を通じて可能となったと考える。